Osaka University Knowledge Archive

Title	留学生と日本人学生の関係形成の様相 : 歓迎会における自己紹介場面データをもとに
Author(s)	今田, 恵美
Citation	大阪大学言語文化学. 2012, 21, p. 3-15
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77779
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

留学生と日本人学生の関係形成の様相

—歓迎会における自己紹介場面データをもとに—*

今田　恵美**

キーワード：接触場面会話、成員カテゴリー化、自己紹介

This paper describes how Japanese and foreign students participate in NS-NNS communication in the early stages of their relationship building. The study focuses on how they categorize themselves while introducing themselves at a welcome party. A new group of graduate school students—five foreigners and three Japanese—comprises the sample of this study. Self-introductions are opportunities for the students to present their identities. The party was held just two weeks after the entrance ceremony. The data, recorded using an IC-recorder, were analyzed using the membership categorization devices (Sacks, 1992) and the focus was on how they referred to themselves, that is, whether they used their real names, nicknames or titles—and the episodes they referred to.

The findings suggest that most Japanese students use nicknames and titles, that is, in-group identity markers. The students under study used these while referring to themselves, and they referred to several episodes in their self-introductions. However, most foreign students didn't use in-group identity markers. They are divided into two groups: those who talked only about their nationalities, lengths of stay in Japan, grades, and majors , and those who talked about their special skills and personality features. Japanese students clearly used co-membership categories like "members in the same course" and "friends". Some foreign students used membership categories like "Japanese-foreigners", while others referred to their individual characters rather than using membership categories. However, there was a similarity: self-deprecating jokes were included in both self-introductions. Japanese students actively narrated self-deprecating incidents as jokes; for example, they talked about embarrassing episodes. Foreign students also talked self-deprecatingly, but not as actively as the Japanese did. These

---

* Constructing Relationships among Japanese Native Speakers and Non-native Speakers: Observation of Self-introduction Speeches at a Welcome Party (IMADA Emi)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

methods are considered "face-work" (Goffman, 1967), that is, a technique to protect one's true identity from others.

The analysis result suggests that the use of co-membership categories, that is, in-group identity markers and references to in-group episodes and self-deprecating jokes may build stronger friendships between the Japanese and foreign students.

1 はじめに

2008年文部科学省が国際化推進戦略の一環として打ち出した「留学生30万人計画」[1]等の影響も受け、国内の留学生数は年々増加傾向にあり、2010年現在14万人を超えている[2]。しかし、数の上での国際化が進む一方、留学生と日本人学生の人間関係の形成という内なる国際化は進んでいるとは言いがたい。横田（1991）は、留学生の多くが、留学生同士の場合に比べて日本人学生に対する自己開示度が低く、友人関係の形成が進んでいないことを指摘している。友人関係形成の成否は出会いのごく初期に決定されるとする山中（1998）[3]等の研究もあり、これまで留学生と日本人学生の接触場面[4]初対面会話について、関係形成阻害要因を追及した研究が数多く行われてきた（伊集院2004他）。しかしながら、その多くは実験室的なデータをもとにしており、彼らの日常生活における自然なコミュニケーションは研究対象となっていない。また、留学生と日本人学生の社会文化的背景の違いを関係形成阻害の前提としており、彼らの関係の多様性を描きだしたものは少ない。本研究の目的は、留学生と日本人学生の出会いの初期における自然会話データをもとに、関係は相互行為の中に立ち現われるものであるという観点からその多様性に注目して、彼らがいかなる関係を形成しているのかを明らかにすることである。

2 研究方法

2. 1 研究対象グループ

西日本の国立大学大学院文系研究科博士前期課程1年に在籍する12名（日本人5名、タイ人4名、中国人3名）[5]。留学生の日本語能力は、研究活動が日本語のみでほぼ円滑

---

[1] 文部科学省ホームページ「平成20年度の報道発表」—「留学生30万人計画」骨子の策定について—参照（http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/07/08080109.htm）2011年9月12日アクセス

[2] 独立行政法人日本学生支援機構ホームページ「平成22年度外国人留学生在籍状況調査結果」参照（http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data10.html）2011年9月12日アクセス

[3] 山中（1998）は日本人学生同士の友人関係の親密化過程を調査したものである。

[4] 本稿においての「接触場面」とは、留学生と日本人学生が日本語を用いてコミュニケーションを取る場面、すなわち「相手言語接触場面」（ファン2006）を指す。

[5] 1年生グループが本研究の調査対象であるが、2年生とも頻繁に交流があるため、収録データ内に存在する彼らの発話に関しても分析の対象とする。

に行えていることから上級と言える。日本滞在歴は個人により異なる[6]。このグループには共同利用可能な院生室が存在し、1年生全員がその運営を担うなんらかの役職についている（例：室長、会計等）。

2. 2　使用データ

入学直後（2011年4月）から1年生の留学生、日本人学生それぞれにICレコーダーを預け、同研究科のメンバーとの会話を1週間に数回録音してもらった（2012年3月まで調査継続を予定）。可能な場合はビデオでの録画も行っている。会話内容は院生の日常生活における自然会話[7]であることが条件で、その内容（雑談・学習等）や録音時間、会話参加人数等は問わない。自然会話収集にあたり、4月の調査開始時に研究科全体にガイダンスを行い、調査協力者以外からの協力も取り付けた。また、週に1度の参与観察と月に1度のフォローアップインタビューにより民族誌的情報を収集することと、データ収集上生じた問題をその都度改善するよう努めた。

本稿で使用するデータは4月の入学式後2週間ほど経過した時期に、院生の多くが参加して行われた新入生歓迎会での自己紹介場面のデータである（調査者は不在。録画は室内の明度不足により資料として不十分なため、分析には使用していない）。自己紹介は出会いの初期において、自らをどのような立場の人間であるか表明する一つの機会と言える。今回のデータに登場する新入生歓迎会参加者の情報は表1のとおりである。なお、本稿で示す個人、団体名称等はすべて仮称とする。

表1　新入生歓迎会参加者[8]情報

	名前	学年	性別	年齢	出身	入学（4月）以前の所属・他のメンバーとの関係
日本人学生	J1	1年	女性	20代前半	日本	同大学他専攻学部生、他メンバーと面識なし
	J2	1年	女性	20代前半	日本	同大学同専攻学部生、留学生との面識あり
	J3	1年	女性	30代半ば	日本	社会人（日本語教師）、他メンバーと面識なし
	J4	2年	男性	20代前半	日本	同専攻1年生、J2、T1、T2、T3、T4と面識あり
	J5	2年	女性	20代前半	日本	同専攻1年生、J2、T1、T2、T3、T4と面識あり
	J6	2年	女性	20代前半	日本	同専攻1年生、J2、T1、T2、T3、T4と面識あり
留学生	T1	1年	女性	30代前半	タイ	同大学同専攻研究生、J2、T2、T3、T4と面識あり
	T2	1年	女性	20代半ば	タイ	同大学同専攻研究生、J2、T1、T3、T4と面識あり
	T3	1年	女性	30代前半	タイ	同大学同専攻研究生、J2、T1、T2、T4と面識あり
	T4	1年	男性	20代半ば	タイ	同大学同専攻研究生、J2、T1、T2、T3と面識あり
	C1	1年	男性	20代前半	中国	他大学学部生、他メンバーと面識なし

[6] タイ人4名中、2名は2年、他の2名は1年。中国人3名中、1名は2年、他の2名は1か月（この2名は本稿のデータ中には登場しない）。
[7] データ内に、録音録画されていることを意識した会話が見られるが、場面的文脈におかれた彼らのふるまいとしては「自然な」データだと捉えている。
[8] 本研究の調査対象である1年生グループ12名のうち、8名（表1参照、J1～3、T1～4、C1）が参加している。

2. 3 分析概念

本研究では、留学生と日本人学生が、出会いの初期においてどのような立場でコミュニケーションに参与し、互いに配慮しながら関係を形成しようとしているかに注目する。分析には以下、三つの概念を中心に用いる。

2. 3. 1 成員カテゴリー化装置（Membership Categorization Devices）

成員カテゴリー化装置とは、Sacks（1992）が、社会の成員がどのような方法に従って成員をカテゴリー化しているか、そのようなカテゴリー化がどのような活動と結びついているかを探求し、定式化したものである。人は複数のカテゴリーの担い手であると言えるが、どのようなカテゴリーが前景化するかは相互行為によって決定される。本研究では、留学生と日本人学生が、出会いの初期における会話においてどのようなカテゴリーを使用しているかに焦点を当てる。特に自己紹介において名乗る際にどのような呼称を用いるか（名前、ニックネーム、役職等）、また使用するカテゴリー集合（「研究科仲間」、「友人同士」といった共有カテゴリー集合、あるいは「日本人―外国人」といった対カテゴリー集合）、さらに、言及するエピソードにも着目した。

2. 3. 2 ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー（Positive Politeness Strategy）

Brown & Levinson（1987）は、他者に理解され、仲間だとみなされたいという欲求である「ポジティブ・フェイス」に訴えかけるストラテジーとして15のポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの存在を指摘している[9]。親密化のストラテジーと言えるこれらが使用されているかも検討する。

2. 3. 3 フェイス・ワーク（face work）における協力

Goffman（1967）は、人は自分のフェイス[10]や他人のフェイスを守るだけでなく、他人たちが自分たち自身のフェイスやその人のフェイスを守るのを手助けするよう配慮するとし、これをフェイス・ワークにおける協力と呼んでいる。このような協力の一典型として相互的な自己否定をあげている。出会いの初期に頻繁にみられる、他人にはお世辞を言って褒めながら、自分のことはけなしたり（謙遜、自己卑下）する行為である。

---

[9] ストラテジー 1: 聞き手の関心・欲求・持ち物に関心を示す、2: 聞き手への共感等を誇張する、3: 聞き手への関心を増す、4: 仲間内のアイデンティティ・マーカーを用いる、5: 同意を求める、6: 非同意を避ける、7: 共通基盤を前提とする／主張する、8: 冗談を言う、9: 聞き手の欲求に関する話し手の知識を主張する、10: 申し出る、約束する、11: 楽観的である、12: ある行動に話者も話し手も含める、13: 理由を与える（求める）、14: 相互利益を前提とする／主張する、15: 聞き手に贈り物（モノ・共感・理解・協力）を与える（Brown and Levinson 1987, p.102）

[10] Goffman（1967）は、フェイスを「認知されているいろいろな社会的属性を尺度にして記述できるような、自分をめぐる心象」と定義している。（Goffman1967 - 浅野敏夫訳　2002 p.5）

本稿でも、出会いの初期における相互的な配慮として、このような現象が見られるかについても検証する。

3　分析

新入生歓迎会では、開始1時間程経過した後、2年生（昨年度院生室長）のJ4が司会役となり新入生の自己紹介が始まった。自己紹介は着席順に日本人学生から行われた。以下、自己紹介が行われた順にデータを提示する。文字化記号はJefferson（2004）[11]を参考とした。会話データの行頭番号は自己紹介開始時からの発話番号、注目する発話に“⇒”,注目する箇所をゴシック体で表す。

3．1　日本人学生の自己紹介

【自己紹介例1　J1】

001 J4	⇒	はいじゃあトップバッター**ヒラさん**お願いしま：：す.
002 J1		はい
003 全員		(2.0)（(拍手)）
004 J1		え：：とM1のJ1と言いま：す.よろしくおねがいしま：:す.
005 J4		よろしくおねがいしま：：す
006 J1	⇒	**え：っと何しゃべりましょう**（1.0）え：：っと:中身**おっさん**が住んでるんでえ,
007		えっ酒飲んだら本性出てくるんで>あんまり飲ませないでください. <

司会役の二年生J4が、J1の指名に「ヒラさん」というニックネームを使用している(001)。同研究科には「山平（J1)」「山原（J3)」と相似した姓の新入生が存在するため、姓の後半の漢字1字を取って「ヒラさん」「ハラさん」と呼ぼうと、4月初旬にJ4が提案したものである。このニックネームは入学後グループ内で発生したものであり、グループ内でしか機能しない「仲間内でのアイデンティティ・マーカー（Brown & Levinson, 1987)」と言える。J4は「ニックネームが通じる仲間」という共有カテゴリー集合を使用しており、指名されたJ1もそれを承認している（002)。さらに、名前と学年の紹介[12]の直後、何を話すべきか言い淀んだJ1は、自己紹介の初めのエピソードとして自

[11] “[　]”：発話の重なり　“(言葉)”：聞き取りが確定できない文字列　“(・・・)”:完全に聞き取り不可の文字列“(m.n)”：沈黙の秒数　“(.)”：0.2秒以下の沈黙　“言葉::”：音の引き延ばし　“言-　”：言葉の途切れ　“h　”：呼気音　“言h　，言（h）”：笑いながらの発話の産出　“¥　¥”：笑い声でなされている発話　“言葉”：強い音で発せられている　“°°”：音が小さい　“？”語尾の音上がり　“,”：語尾の音少し下がり，弾みつき　“.”:語尾の音下がり区切り　“((　))”:その他の注記“><”:早く発話されている　“<　>”遅く発話されている

[12] M1とは、博士前期課程1年生を指す。

らの酒癖について、自分を表象する呼称として「おっさん」を用いて冗談めいた自己卑下的な側面の呈示を行っている。

【自己紹介例２　J2】

032 J2	⇒	えっと：M1 の J2 です．(0.2) **あだなっは：ピノコですって**（.）
033		＞**あだなはピノコですってずっとゆってるんですけど：**＜あんまり（.）
034		**だれもピノコって呼んでくれ［ない**
035 全員		[hahahahahahhaha
036 北川	⇒	**J2 さん（じゃなくて）ピノコって呼んでくれたら**
037 J1		**ピノコ：：**
038 J2	⇒	**もっとなんか親しみやすくなれるかなっと**
039 全員		hhhhhhhhhhhhhhhhhhhhhhhh
		（中略）
062 J2		みなさん：あのいろいろよろしくお願いしま：す．
063 全員		((拍手))
064 J4	⇒	**室長**でした：

J2 は冒頭で強勢を置いて繰り返しニックネームを主張し（032、033）、ニックネームで呼ばれていない現状への不満を示している（034）。さらにニックネームで呼ばれることが関係の親密さを示すという認識を示し（036、038）、親密なカテゴリー集合を共有することへの提案を行っている。この後、J2 は指導教員に叱られたという自己卑下的エピソードを笑いを交えて呈示していた。また、司会役の J4 は J2 の自己紹介後に彼女を役職名で呼んでいる（064）[13]。役職名もニックネームと同じくグループ内でしか通じないものであり、こちらも「研究科メンバー」という共有カテゴリー集合を利用したふるまいと言える。

【自己紹介例３　J3】

082 J3	⇒	で：(2.0) いちおう田中ゼミ - なんですけどぉ (1.0) ちょっとテーマについ
083		てこないだ話したら：もお（.）おもっきり覆されてもうまっしろ今も
084		う白紙の -.h¥ 状態で凹んでます．¥ ［なんでとりあえず

[13] フォローアップインタビューによれば、J4 は前年度室長として役割交替したことを研究科メンバーに知らせたかったということである。J4 は司会者としての意識も持っており、自己紹介の順序などにも配慮していた。

085 J5　　［自己紹介（・・・）
086 ?　　hhh
087 J5　　田中ゼミについては（またそれも）
088 全員　hhhhhhhhhh
089 J3　⇒ ぜひ**先輩**から（・・・・・）アドバイスをお願いします
090 ?　　hhhhh
091 J5　　**録画されていない時に**
092 ?　　hhhhhhhhhh
093 J3　⇒ **オフレコ**で：
094 全員　((拍手)) ahahahahaha
095 J3　⇒ **オフレコ**でじゃあ：あの：(きっとき) ますんで：はい (.) はい
096　　ぜひお願いしま：すということで：す. ¥よろしくおねがいしま：す. ¥

この断片に先行する冒頭で、J3は年齢（30代半ば）に言及し、年齢の割に中身は伴っていないので仲良くしてほしいという自己卑下的発話をしている。さらに所属ゼミの先生に研究を考え直すよう指示され落胆しているという自己卑下のエピソードを重ねている（082 - 084)。この自己卑下は、聴衆に冗談として取られていることが、繰り返される笑いから解釈可能である（086、088他)。

J3に対し、同じゼミに所属する2年生のJ5は別の機会に愚痴を聞こうと提案をする(087)。J3は「先輩」という語を使用し助言を求めているが（089)、「先輩」はゼミメンバーという共有カテゴリー集合を利用した呼称と言える。この会話が録画されていることを知っているJ5は録画されていないときに話そう（091）という提案を行い、J3はそれを受け入れている（093、095)。これは秘密の話をしようという意味であり、「ゼミ仲間」からさらに親密度を高めた「秘密を共有する仲間」というカテゴリー集合を使用することへの提案と受け入れとして聞くことができる。

3. 2　留学生の自己紹介

【自己紹介例4　T1】

100 J6　⇒ はいじゃあ**次**お願いしま：す
101 T1　⇒ はいえ：と：**タイ - から - [きましたダオです.**
　　(中略)
112 T1　⇒ **質問してください**

113 J?　⇒（ん：っと）じゃあ**特技**はありますか
　　（中略）
119 T1　⇒ **うまいことは - 寝るです.**

2年生のJ6がT1を指名するが、名前や役職名等は使用していない。このことは、J6がT1に関してほとんど知識がないこと[14]を示している。T1は出身国と名前(ニックネーム[15])のみを述べ、自らは情報提供せずに聞き手に（自分について）質問してほしいと委ねている。このことは、T1が自分を留学生としてカテゴリー化していることを示しており、「留学生 - 日本人学生」という対カテゴリー集合を利用していると言える。また、日本人学生がT1に特技について質問しているが（113)、特技や趣味についての情報は、その人物を褒めるリソースとなりうる。自己紹介場面でこの質問がまず挙がったこと、その質問（113）に対して、T1が「寝る」(119）という冗談めかした自慢回避の返答をしているのは、相互的な配慮（フェイス・ワークにおける協力）と言える。

【自己紹介例5　T2】

128 T2　⇒ みなさんこんばんは：**タイからまいりました：フォンです.**
129　　よろしくお願いしま：す.
130 J?　　(2.0　hhhhhh)
131 J4　　ずるいずるい

T2は、T1と同様出身国と名前（ニックネーム）のみを述べ（128)、そのあとに沈黙がある（130)。この沈黙は他のメンバーがT2のさらなる情報提供を待つ間であると言えるが、T2からの情報開示はない。131行目のJ4の「ずるいずるい」という発話は、日本語能力試験1級に合格しているほど日本語能力がありながら、T2の情報開示が少ないことに向けられている。この後の特技や趣味についての日本人の学生からの質問にもT2は特にないと答えている。T2も「留学生 - 日本人学生」の対カテゴリー集合を使用している。

[14] J6によれば、この時点ではT1の顔と名前が一致していなかったとのことである。
[15] フォローアップインタビューを行ったところ、タイ人留学生は全員幼少時からのニックネームを持っており、日常生活では通常本名よりもこのニックネームを使用するとのことである。そのため、タイ人のニックネーム使用が、少なくとも日本人のそれほどには親しさの積極的な表示であるとは言えない。また、学校などの公式な場での自己紹介は最初の一回のみ本名を名乗ることが多いが、本名が長く聞き手が覚えられないことが多いため、特に今回は相手が日本人であることに配慮してニックネームで名乗ったとのことである。

【自己紹介例 6　T3】

191	T3 ⇒	M1 の T3 で：す
192	複数	T3 さ：：：ん
193	T3	**自分の方から言うのもなんかあれなんですけど**も：(2.5) う：：：ん
194		料理が上手で：：す
195	全員	おおおおおおおお（拍手）
196	T3 ⇒	や - でも**タイ料理はできませ：：ん**
197	全員	えええええええええええええ
198	J4	何料［理
199	?	［何［料理
200	J6	［何料理
201	T3 ⇒	**まあ日本料理です.**
202	全員	お［おおおおおお
203	全員	［えええええええ
204	J3	え：すご：い

T3 は冒頭で学年と名前[16]を述べているが、T1、T2 と異なり出身国には言及していない（191）。しかし、既に彼女がグループ内において知られ、受け入れられていることは、聞き手の反応から伺える（192）。

T3 は、まず「自慢は避けるべき」との認識を示しつつも（193）、他の学生の自己卑下や謙遜とは対照的に「料理が上手」と自慢をしている（194）。それにもかかわらず、聞き手に受け入れられている（195）。

次に、「でもタイ料理はできません」と述べている（196）。T3 は得意料理ではなく、苦手料理に言及しており、しかもそれは「タイ料理」である。この発話は二つの働きをしている。一つは、あえて苦手料理に言及し自己卑下することで、先ほど T3 自身が行った自慢に対するバランスを取る働きである。もう一つは、カテゴリー付随活動[17]を利用した冗談である。聞き手はほぼ全員、T3 がタイ人であることを既に認識しており、「料理が上手」といえば「タイ料理が上手である」ことを一般的に予想する。T3 は自分がタイ人としてカテゴリー化されていることを知りつつ、そのカテゴリーから予想されることと異なることを述べることで冗談としている。聞き手の予想が外れたことは、その

[16] 今回のデータでは、タイ人留学生の中で T3 のみがニックネームではなく本名を使用していた。ただし、T3 の本名はタイ人の名前の中では短く覚えやすいため使用したということである。T3 はタイ人留学生の間ではニックネームで呼ばれている。

[17] カテゴリーにはその成員が行うことを一般的に期待されているような活動があり、Sacks（1992）はそのような活動のことを「カテゴリー付随活動」と呼んだ。

反応から明らかである（197）。

最後に、聞き手から催促を受けた（198-200）T3は、得意料理の正体が「日本料理」であることを明かすことによって、日本人学生の聞き手に親しみを積極的に感じさせている。

以上のように、T3は自らを明示的にはカテゴリー化していないが、聞き手から「タイ人」とカテゴリー化されていることを利用した冗談を行っていた。しかしながら、「日本料理が得意な、日本人的なタイ人」として自らを特徴付けており、単純なカテゴリーに収まりきらない個性に焦点をあてていた。また、自慢をしているにもかかわらず聞き手に受け入れられている様子が非常に特徴的である。

【自己紹介例7　C1】

211	C1	⇒ **C1です．え：M1から -**
212	J4	M1から？
213	全員	(2.0) hhhh
214	C1	や：(・・・)
215	J3	¥からの？¥
216	C1	(からの：：°わからないわからない°)
217		⇒ **¥え：専門は古代日本語です．¥あの：3年ほどここで留学しています．**
218		よろしくお願いします

C1は、冒頭で学年に触れ「M1から」と述べかけ中断している（211）。J4は「から」に強勢を置いて繰り返し、継続を促している（212）。その後、沈黙と他の学生からの笑いが生じ、C1は続けて何かをいいかけるが（214）、今度はJ3が発話の修正を促している（215）。J3は、日本語に関して知識を持つ「母語話者（日本人学生）」として振る舞っており、C1は「外国人留学生」としてカテゴリー化されている。C1は訂正をしようとするが断念し（216）、専門と日本滞在歴（217）に言及している。C1は一般的な留学生カテゴリーを示しているものと言える。

【自己紹介例8　T4】

221	T4	⇒ **え：タイから来ましたヌムと申します．（人見知りです）**
222	J6	ははは新しい情報でした
223	T4	あそうですね：最近むずかしいなあ：と感じたのはあの先に人に話しかけることですね．

224 J3	あ：：：：
225 T4	こう見えても人見知りするんであの：まあ（どんどん声をかけ）てやってください.

T4は出身国に言及し、名前（ニックネーム）を名乗った後、短所（人見知り）について自己卑下的な自己開示をしている（221、223)。そのうえで声をかけてほしいと述べ（225)、他のメンバーと積極的に仲良くなりたいという意思表示をしている。T4の自己紹介は、留学生カテゴリーよりも自分の個性に焦点をあてたものと言える。

4　考察

4．1　成員カテゴリー化、ポライトネスの観点から

以上の結果から、日本人学生と留学生がお互いにどのように自分と他人をカテゴリー化しているのかについてまとめる。

日本人学生は、総じて「研究科メンバー」「仲間」という共有カテゴリー集合を利用していた。呼称には、ニックネームや研究科の役職名が顕著に使用されていた。これは、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとしての「仲間内のアイデンティティ・マーカー」の使用にあたる。また、研究科内のエピソードに言及する例も多かった。

一方、留学生は、「留学生―日本人学生」という対カテゴリー集合を利用している例が多かった。呼称は、日本人学生のように親しさのマーカーとして利用している例は見られなかった。さらに言及内容は、出身、学年、専門など最小限の情報開示に留まるものが多かった（T1、T2、C1)。これらは「外国人留学生」として自らをカテゴリー化する振る舞いと言える。また、日本人学生にも留学生の発話訂正をするなど「日本人学生―留学生」というカテゴリー集合を利用した振る舞いが見られた（J3、J4)。ただし、留学生の中には、留学生カテゴリーよりも自らの個性に焦点をあてた自己紹介をする者もあった。(T3、T4)。

4．2　フェイス・ワークにおける協力

次に、日本人学生と留学生の自己紹介の双方に笑いを交えた自己卑下や自慢回避の傾向が見られたことから、Goffman（1967）のフェイス・ワークにおける協力という観点でデータを考察する。

日本人学生は自己紹介者全員が、自己卑下的な情報開示を積極的に行っていた。そして聞き手に笑いで受け止められていた。このことは、自己卑下が親しみやすさを示す冗

談として機能することを表している。

一方留学生には積極的な自己卑下的情報開示はあまりなかったが、質問の答えとして自慢を回避するような傾向は見られた（T1、T2）。特に、T1は特技についての質問に対して「寝る」と答えるなど冗談として親しみやすさを表示するような返答を行っていた。特技や趣味についての質問は、褒めのリソースを得るための手段になりうることから、グループのメンバーたちが、他者を褒め、自分は謙遜するフェイス・ワークにおける協力を行っていたことが伺える。またT4は自己卑下的な側面を開示しながら、積極的に関係を形成したいという主張を行っていた。

他の学生とは異なる例として、T3は配慮を示しながらも自慢を行っていた。それにもかかわらず、聞き手に受け入れられていたのが印象的である。「褒め―謙遜」という相互的な配慮の次のステップに進んでいる可能性も考えうる。

5　まとめと今後の課題

本稿は、留学生と日本人学生が出会いの初期にどのように友人関係を形成していくか、関係の多様性に注目して分析を行ってきた。成員カテゴリー化装置を使用し分析したことで、まず、さまざまなストラテジー（呼称、エピソード等）を使用し、相互に配慮しながら関係を形成しようとしている彼らの多様な姿を描きだすことができた（「研究科仲間」というカテゴリー集合を共有する者、「留学生―日本人学生」の関係にある者、そのようなカテゴリーよりもむしろ個性を示す者等）。次に、友人関係形成のためのストラテジーについて、いくつかの示唆を得た。仲間内のアイデンティティ・マーカーの使用や、自己卑下的エピソードの開示により親密さを示すこと等である。

今回得られた知見でもあり、今後の課題ともなるのは、会話参与者たちのフェイス・ワークにおける協力の在り方である。積極的か消極的かの差はあれ、他者については褒め、自分については冗談まじりに自己卑下する様相が観察された。これはフェイス・ワークにおける協力であると同時に、親密さを示すストラテジーともなっていた。一方で、自慢しながらも他のメンバーに受け入れられている例もあった。これは今後発展していく彼らの関係性の一つの在り方である可能性がある。今後、このフェイス・ワークにおける協力の在り方の時間経過による変化を中心に分析していくことで、彼らの関係性の変化を描きだすことができるのではないかと考えている。

参考文献

伊集院郁子「母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け―母語場面と接触場面の相違―」『社会言語科学』第6巻第2号、社会言語科学会、2004年、

pp.12-26。

サウクエン・ファン「接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題」、国立国語研究所編『日本語教育の新たな文脈―学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性』、アルク、2006 年、pp.120-141。

横田雅弘「自己開示から見た留学生と日本人学生の友人関係」『一橋論叢』第 105 巻 5 号、一橋大学、1991 年、pp.629-647。

山中一英「大学生の友人関係の親密化過程に関する事例分析的研究」『社会心理学研究』13 巻 2 号、日本社会心理学会、1998 年、pp.93-102。

Brown, P. & Levinson, S. (1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*, Cambridge University Press.

Goffman, E. (1967). *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behaviour,* New York: Doubleday Anchor.（浅野敏夫訳．(2002)．『儀礼としての相互行為』法政大学出版局）

Jefferson, G. (2004) Glossary of transcript symbols with an introduction. Gene Lerner (ed.) *Conversation Analysis: Studies from the first generation.* Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins. 13-31

Sacks, H. (1992) *Lectures on Conversation*, 2 vols. Cambridge: Blackwell.

Sacks, H. & Schegloff, E. A. (1979). Two preferences in the organization of reference to persons in conversation and their interaction. In G. Psathas (ed.), *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology.* New York: Irvington. 15-21